

## 三浦市立南下浦中学校

研究テーマ：学力の三要素を意識した授業作り

### 1、実践の目的

これまで「学力の三要素を意識しながら生徒が気付く授業づくり」を研究テーマとし、生徒の「気付き」を大切にして学力向上に力を入れて取り組んできた。生徒の学力に課題がある一方で、前向きに授業に臨む生徒や、自分の考えを持とうと取り組む生徒の姿が見られる。また、昨年度の全国学力・学習状況調査の生徒質問紙調査でも、「今回の国語の問題では、解答を文章で書く問題がありました。それらの問題について、どのように解答しましたか」という質問に対する回答で、「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」という回答が全国平均を上回り、「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」という質問に対しての肯定的な回答が、全国平均を上回っていた。上記のような生徒の実態を踏まえながら、南下浦中学校としてどのように生徒の力を伸ばしていき、どんな生徒を育てていきたいかということ、研究推進委員会を中心に検討し、前年度のテーマから「学力の三要素」というキーワードを継続させ、生徒の資質・能力のさらなる向上に向けて「学力の三要素を意識した授業づくり」というテーマで実践することとした。このテーマで実践することで、生徒の資質・能力の向上に向けて、教員間での授業に関するコミュニケーションを充実させ、授業について日常的に対話や検討ができる雰囲気作りの醸成を目指す。

### 2、実践の内容

#### (1) 校内研究の組織体制

今年度は、校内での授業研究会を中心として行い、職員を2人1組のペアとしてT1とT2という形を取った。ペアの組み合わせは、研究推進委員会がランダムに振り分け、必ず自身の教科とは別の教科の先生と組み、研究授業を行うこととした。

#### (2) 授業研究会の実施

授業研究会は、全ての教員が必ず自分の教科で他教科の教員を受け入れて授業をする「T1授業」と、他教科の教員の授業にT2として入り、ある場面でT1として授業を進める「T2授業」を行った。(特別支援学級担任は、「T2授業」のみ実施。)

授業研究会の組み合わせとしては、次の【表1】のような組み合わせで行った。

公開授業 組み合わせ(教科名)

	T1	T2		T1	T2
1	社会科	国語科	12	数学科	特別支援学級担任
2	英語科	特別支援学級担任	13	体育科	音楽科
3	国語科	社会科	14	英語科	体育科
4	理科科	数学科	15	国語科	体育科
5	技術科	英語科	16	美術科	家庭科
6	数学科	英語科	17	社会科	理科科
7	数学科	特別支援学級担任	18	数学科	英語科
8	音楽科	美術科	19	体育科	数学科
9	理科科	数学科	20	体育科	数学科
10	国語科	技術科	21	英語科	社会科
11	家庭科	数学科	22	英語科	体育科

【表1】

授業検討の時間を、ペアとなった教員間で調整し合って設けていた。また、どのような関わり方が効果的かということを考え合ったり、この單元ではどのような資質・能力の育成を目指すのか、どういった授業構想なのかということ話し合い、T2として入る他教科の先生からのアドバイスを基に、授業展開を変更したり付け加えたりした場面もあった。

授業の実際の例としては、次の【写真1】  
【写真2】のようなものがあった。



【写真1】

【写真1】は、家庭科の授業に数学科の教員がT2として加わり、子どもとの関わり方についての授業を行ったときの様子である。子どもを育てる父親の立場として、現実に直面する子育てのうえでの問題を取り上げながら授業を展開していた。



【写真2】

【写真2】は国語科の授業に技術科の教員がT2として加わり、スピーチのリハーサ

ルを行った授業である。リハーサルでは、グループの中で聞き合うだけでなく、タブレットで録画をした。そのリハーサルの形やタブレットの細かい操作方法について技術科の教員と検討し、授業を構想していた。

### 3、実践の成果

#### (1) 授業研究会の成果

全ての教員がT1、T2として授業を行う中で、自然と授業について対話する場面が増えていった。また、自身の教科とは別の教科と組むことで、その教科の特性や難しさ、自身の教科との繋がりなど、様々なことに気付くことができた。

今回の授業研究会を終えて、全体での校内研究会を行った。その中で、「自分の教科との繋がりが見える場面があった。お互いの教科でどのようなことを行っているかを知ることができれば、カリキュラム・マネジメントに繋がり、生徒の資質・能力をより効果的に育むことができるのではないか」という意見が出された。

このように、今年度の研究は、教員間の対話の充実や互いを知るということだけでなく、次年度以降の学校全体のカリキュラムにまで繋げることができた。

### 4、今後の展開

今後の研究の方向性は、全員が校内研究会、授業研究会に関わっていくことを継続する。今年度教員間での授業に関するコミュニケーションの素地は概ね形成されたと考えられるので、次年度はさらに発展させ、授業の内容に踏み込んだ授業研究を行っていきたい。